

## 流れが広がる閲覧室

—— 館長に就任して ——



総合図書館館長  
荒井 洸

洸



図書館の二階の閲覧室からは、思い川の流れがひろびろと眺められます。静かな、幸せな空間です。

タイトルと手ざわりのよい本を1冊、書架から取り出して机の上に置き、然るべきページを開きます。すると、すてきなセンテンスが思い川の流れに乗るかのようにして、心に深く語りかけてきます。

時代のせわしない転変にいちいち振り向かず、書架の本たちは心ある人が手に取ってくれることを、じっと待ち望んでいます。

図書館は、心と知性を潤すオアシスであるべきなのだ、古今東西の名著を前にして思いに浸ります。そして、現代社会の巨大な投網にすっぽりと包み込まれているらしい私たちにとって、純粋な人間論に立ち返れる、そんな所であり続けられたら、とも願うのです。

## 「趣味」としての読書

法学部長・教授  
三好 登

登



「趣味」は読書である。「趣味」であるから、それで勉強しようとか、人格を形成しようとか、将来何かに役立てようとか、そういうことは一切関係なく、本屋で本を探している時、本を夢中で読んでいる時、そして読んだ後の満足感をただただ楽しみたいだけのことである(いうまでもないことであるが、民法その他の法律に関する研究書、論文、資料などを読むのはあくまで仕事であって趣味ではない)。

御多分に漏れず、子供の頃は、漫画である。田河水泡の『のらくろ』、島田啓三の『冒険ダン吉』(古いなあ!)あたりから夢中にな

り始め、手塚治虫の『新宝島』に子供ながら衝撃を受ける。雑誌「少年」「少年クラブ」「冒険活劇文庫」「おもしろブック」それに「譚海」というのもあったが覚えていますか。「少年」に載った『鉄腕アトム』を始めとする手塚治虫の漫画、小松崎茂の『地球SOS』、山川惣治の『少年王者』etc。

最初に夢中になった小説は、言わずと知れたコナン・ドイルの「シャーロック・ホームズ」もの、以来世界の名作といわれる、一連の推理小説の古典的作品に夢中になり、エドガー・アラン・ポー、アガサ・クリスティ、

エラリー・クイーン、ヴァン・ダイン、デイクスン・カー、ほとんど読んでしまった。特にデイクスン・カーの歴史もの、密室ものにはまりました。

最もショックを受けた推理小説をひとつあげよといわれたら、ウィリアム・アイリッシュの『幻の女』ですね。今でもあの時の余韻が残っている。

ついで日本の江戸川乱歩（子供の頃にはおなじみの『怪人二十面相』『少年探偵団』など）その他。最も夢中になったのは、『本陣殺人事件』を始めとする横溝正史のほとんど全てのあの著書群、『八つ墓村』『犬神家の一族』『獄門島』etc. 角川書店がこの横溝作品を文庫と映画に結びつけて一大キャンペーンを繰り広げたのはずっと後の話である。ということで推理小説は卒業したといってもいいのでいまはあまり読まない。

そんなわけで暇さえあればもうひとつ夢中になった映画とともに本を読んでいた。それでも中学の時は仲間と遊びまわっていたが、高校時代はただただ映画三昧で完全な落ちこぼれ。大学には現役で受かるはずもなく、一浪して大学に入ってから読みつけ、松本清張の『点と線』を嚆矢として、以来清張ものを読み続け、やや飽きた頃『蒼ざめた馬を見よ』の五木寛之、『エロ事師たち』の野坂昭如、となり、あと井上ひさしや北杜夫など。またその頃、C・S・フォレストラーによるイギリスの歴史海洋物「ホーンブロー」シリーズ全巻、同じイギリスの作家、アリスティア・マクリーンの冒険活劇物、代表作は『女王陛下のユリシーズ号』、山上たつひこ「喜劇新

思想大系」全巻（究極のナンセンス漫画！）も面白かった。というわけで大学も落ちこぼれ。

近年は、歳のせいで読書力も衰え、もっぱらエッセイ専門で、以前からの田辺聖子「カモカのおっちゃん」シリーズや、イギリス留学の影響で、イギリス狂いとなり、林望の『イギリスはおいしい』を始めとするイギリスものを読み漁る。井形慶子も悪くないが、最近粗製濫造で魅力半減。

目下のところは、『観光の哀しみ』、『都と京』などの酒井順子（「最近『負け犬の遠吠え』でブレイクしました！」）。

ある作家の本を一冊だけ読むとすれば、出世作というか処女作というか最初の著書に限る。やはりその著者の原点ということでその著者の特質がもっともよく現われているからであろう。あとは全てその亜流である。

本屋で本を探していると時間はあっという間に過ぎてしまう。この楽しさ!! まさに「趣味」の醍醐味である。そして、これは結果論であるが、この読書からどれだけ生きる力をもらったことか。

白鷗大学の図書館には、研究書以外の本も沢山ある。図書館で手に取った本がきっかけになって読書の虫になる学生が1人でも増えることがあればこんな嬉しい事はない。

(追) この8月に久しく絶版となっていたドナルド・A・スタンウッド『エヴァ・ライカーの記憶』（創元社推理文庫）が、文庫本になって発行された。推理小説の醍醐味をじっくりと味わいたい方、ご一読をお薦めします。

## 活字中毒者のひとり言

経営学部教授  
柳川 高行



わたくしは職業がら、活字を中心とする情報とインタビューして人の話を聴くことで、活字情報とオーラル情報と日々接触し、一般新聞だけで8紙、一般週刊誌を週10冊、さ

らに専門紙や専門誌を読み、インタビューをテープ起こししてメモをつくり、情報のデータベースづくりに励んでいます。inputされた情報の海の中へ、いくつかのキーワー

ドの錨を降ろし、知の連結化と、知の組み替えを毎日行ない、講義や研究論文で「借り物ではない正真正銘の新しい知 (something new)」であると同時に、学生の方々が世の中に出て「使える知 (practical knowledge)」を創造、提供することを日々行なっております。大学人の中には、文字通りのsleeping researcherや、10数年後の大作を温め続けているsleeping tiger researcherが少なからずおられますが、わたくしは、小品ながらも、佳品と確信している論考をconstantに発表させて頂いております。

前置きが長くなりましたが、このエッセーでは、学生諸君、諸嬢に何冊かの本をお勧めし、是非総合図書館で手に取って頂きたいと考えております。

### 1. 新入生の若き友へのお勧め本

#### 『足ながおじさん』

大学で学ぶということが、いかに光り輝いた日々に満ち満ちているのかということ、孤児という身の上ゆえに大学に通えることなど絶対に有り得ないことだと思っていた少女が、ある日突然「足ながおじさん」という奇特な人からの寄附金で大学へ進学し、夢のような、毎日が発見と驚きと知的成長を味わう歓喜の日々（まさに本学のカレッジスローガンであるSomething New to Discover Every Dayがピッタリと当てはまると思われまます）を描いたのが、J.ウェブスターの『足ながおじさん』です。全ての新入生の皆様はこの本をお勧めします。

### 2. 教育学部で学ぶ若き友へ

教育とは明日の日本を支える人々に、人生を生き抜く力 (Livability) の源泉である学習能力 (Learnability) を身に付けさせる崇高でやりがい満ちた仕事です。

次の3冊が特にお勧めです。教育学部を始め、教職を目指す方々には、第1に、黒柳徹子さんの『窓ぎわのトットちゃん』（講談社文庫）がお勧めです。小林宗作先生がトットちゃんにいつも話しかける「君は本当はいい子なんだよ」(You're really a good girl, I know.) という言葉ほど、「ピグマリオン効果」をよく表わした言葉を他に探すことは難しいでしょう。わたくしは、恩師の藻利重隆

先生から先生を国立駅へお送りした時に、企業は「SeinかSollenか？」というおたずねに、「Werdenではないでしょうか」とお答えしたら、「柳川君、人間は死ぬまで成長するんだよ」(今は君は全く芽が出ていないけれど、ゆっくりと急いで努力し続ければ、きっといつか花開く日が来るよ。I believe you can do it!) と言って頂いた時の心の震えるような感動をトットちゃんも味わったに違いありません。

第2にお勧めしたいのは、生涯一國語教師として過ごされた大村はま先生の本は実に沢山出版されていますが、『新編教室をいきいきと1、2』（ちくま学芸文庫、1994年）をまずお読みになると良いでしょう。大村先生は、授業に工夫を重ね続けることに生涯を捧げた教師愛のかたまり（塊）のような方でした。

日本を代表する超優良企業であるトヨタは、『日々是改善』、「more than best」をコーポレート・スローガンにしていますが、わたくし自身も“more than today's lecture”を掲げて生きてまいりました。皆さんも「打倒大村はま先生」を目指して精進して欲しいと思います。

教職大学院や教育学系の大学院進学を考えておられる方には、目下、わたくし達教職大学院の在り方(マネジメントとカリキュラム)を研究しているグループで論読している次の本がお勧めです。『キー・コンピテンシー国際標準の学力をめざして—OECD DeSeCo コンピテンシーの定義と選択』、2006年、明石書店。わたくしは、冬休み中に、この本についての書評論文を一本まとめました。

### 3. 法学部で学ぶ若き友へ

法学はパンのための学問 (Brotenswissenschaft) と呼ばれ、経営学が金儲けの学問 (Profitlehre) と呼ばれたことから分かるようにドイツではこの2つの学問は等しく卑しい実用の学問とされ、哲学や経済学より一段低い学問だと見られていましたが、日本では事情がかなり違って、わたくしのような「企業社会の現実の分析的説明」をその専門家とする経営学の経験科学的研究に従事する者からは近寄り難い高尚過ぎる学問ですので恐れ多くて全く勉強していない分野です

から、推薦すべき適切な本は分からないというのが正直な所ですが、大学院生時代に読んだ次のものには、大変感銘を受けました。関心をお持ちになられた方は、よろしければ手に取って見て下さい。

a) 川島武宜先生編著の『法社会学講座』  
(全10巻岩波書店)

新しい法社会学という学問を創造しようという高い志と気負いと熱気が、特に川島先生の文章からは燃え立ってくるような本で、新しい学問領域のemerging pointに立ち会えた幸福を、わたくしは味わいました。(大変残念ですが、この講座は、本学図書館には在りませんが、川島先生の書かれた文章は、『川島武宜著作集』全11巻(岩波書店)の中に収載されています。)

b) 碧海純一先生の『新版法哲学概論』  
(弘文堂)

この本の中の因果関係の説明の仕方の余りの分かり易さに驚いたものです。

#### 4. 経営学部で学ぶ若き友へ

経営学部の方々に是非読んで欲しい本は、そんなに多くはなくて、何冊かしかありませんが、わたくし個人のこの1冊と問われれば恩師藤利重隆先生の『経営学の基礎』(森山書店)以外にはありません。大学3年生の夏休み一杯かけて何とかメモを取りながら1冊読み上げた時に、わたくしのその後の人生が決まり、運良く先生の最後の弟子となることができ、最高の師から直接日々お教えを受ける幸福を与えられましたが、良い本ですが、少々難しい本で、当時から大学院レベルの本でした。大学院の同期生で、わたくしとは月とスポン以上に出来がまるで違う優秀な榊原清則さんの『企業ドメインの戦略論』(1992年、中公新書)が最良の1冊でしょう。この本の凄い所は、「企業ドメイン」というタイ

トルの本は、世界中でこれ1冊しかないという点もありますが、それ以上に、本の中の概念も理論もそして、事例分析も100%オリジナルであるという点です。concept makingもtheory buildingも全て榊原モデルであり、そのモデルの現実の分析的説明力の高さは、脱帽するしかない素晴らしい本です。わたくしは、仕事柄かなりの本や論文を読みますが、再読に耐える良いものは減多にお目にかかれませんが、再読に耐える良いものは減多にお目にかかれませんが、大学院でパッチワークのソフィステイケートなやり方しか学んできてないような方々が多過ぎて、そういう本は読むと頭が腐ってくるようなシロモノか、リポビタンブックスです。わたくしは、この本は何十回となく読んでいますが、読む度に新しく学び直してラインマーカーと、サインペンで書き込みをしていますが、そういう宝物のような本は、日本人の書いたものには余り多くはありません(事情はアメリカでも同じですが)。これ以外に、わたくしが教科書として使用している本を次に揚げておきます。

榊原清則、『経営学入門(上)(下)』(日経文庫)  
沼上幹(榊原さんのお弟子さんです)『わかりやすいマーケティング戦略』(有斐閣アルマ)  
菊池敏夫・平田光弘編著、『企業統治の国際比較』、文真堂(柳川も分担執筆しています)

#### 5. 全ての白鷗人へのお勧め本

1. 新川清治准教授の恩師渡辺昇一氏の『自由をいかに守るかーハイエクを読み直すー』  
PHP新書
2. 立木信、『若者を喰い物にし続ける社会』  
洋泉社新書
3. 遠藤展子、『藤沢周平 父の周辺』  
文藝春秋
4. 井上紀子、『城山三郎が娘に語った戦争』  
朝日新聞社



本館カウンター前の新着コーナーに「基礎ゼミ担当教員による推薦図書」の一覧表があります。すべて所蔵していますので、ぜひ読んでみてください!!

平成20年10月24日 発行  
編集 図書館だより編集委員会  
発行 白鷗大学総合図書館  
〒323-8585 栃木県小山市大行寺1117  
(0285)22-9737 (直通)  
ホームページ <http://web.hakuoh.ac.jp/lib/index.html>  
印刷 株尚文堂印刷所